

二度目は貴方と

王太子妃を辞めさせられたその後

※ エドモンド ※

レベッカたちの国の王太子。
清廉で賢明だが、
後継者の都合に
よりレベッカと離縁。

※ シンシア ※

レベッカが離縁した後、
新しくエドモンドの
妃となった王太子妃。
気位が高い。

※ 宰相 ※

別名古狸。
腹黒狡猾で王宮政治を
生き抜いているが、
職務には忠実。意外と愛妻家。

※ アンネマリー ※

レベッカの侍女。
レベッカとは
気の置けない関係。
心で通じ合っている……？

※ レベッカ ※

本作の主人公。
懐妊をしなかったことから王太子妃を
辞めさせられ、
アルバートに輿入れする。
温厚で勤勉だが、もしかしたら天然。

※ アルバート ※

再婚したレベッカの現在の夫。
マグダナス伯爵家の当主。
レベッカとは以前からの
顔見知りの関係。

第一章

レベツカは、刺し終えたばかりの刺繍ししゅうを指先でなぞつて出来栄できばえを確かめた。
冠クラウンを仰ぐ三本の剣。

冠には本来、伯爵位を表す八枚の苺いちごの葉と八個の真珠を飾るのだが、細かいから省略した。

「なんだか淋しい印象になっちゃったわね」

獅子や鷺わしや、よくわからない獣けもののモチーフを紋章とする家は多い。

だがマグダナス伯爵家のシンボルは、天に掲げられた冠を三本の剣が仰ぐ、すっきりとしたものである。

モットーは『賢王を愛せ』。

正しく臣下しんかとして王に侍り、王家に仕える家門の証あかしである。

マグダナス一族は、始祖の代から王家の側近を務める家柄であつた。

現当主のアルバートもまた、王太子エドモンドの側近となっている。エドモンドが国王に即位したのちには、彼も主君とともに国政に携わることとなる。

アルバート・キャンベル・マグダナス。

金髪に紺碧色の瞳を持つ、レベッカの夫。厳密に言うなら、二度目の夫。

レベッカは、つい先頃まで王城で暮らしていた。王城にいて忙しく働いていた。

彼女には執務があつて、それらの中には気を抜くことができない案件も多く含まれていた。

仕上げた書類の最終確認をすることはあつても、こんなふうに刺繍の出来栄を確認することは、

三年の間、一度もなかった。

三年間、夫に刺繍をして贈ることすらなかったのだ。

そんなことから、こんなことになったのかしら。

本当の理由がそうではないことを、自身が一番理解している。

レベッカは、今現在の自分の在りようを静かに受け止めていた。

仕方がなかったのだ。だつて子を成せなかったのだから。

どれほど執務に励んでも、どれほど夫を助けても、国の次代を担う子を一人も産むことができなかった。

「少しお時間を取られてお身体を休ませて、ゆつたりとしたお心持ちでいらつしやれば、或いは……」

王城の医師は、そんな曖昧なことを言っていた。だが、彼らはそれを待つてはくれなかった。

窓の外から小鳥が囀るのが聞こえる。少し開けた隙間から入り込む風に混じり、花の香りが漂っていた。

春は深まりうらかな陽気で、庭園のガゼボで刺繍しようか迷つたが、風があるのでやめた。

レベッカ・キャンベル・マグダナス。

ブルネットの巻き髪をゆつたりと結びあげて、榛色の大きな瞳は目尻がほんのり垂れている。

少しばかりぼつちやりめであることは、本人は気にしていない。

レベッカは、先月、春の初めの芽吹きどきに、四つ年上のアルバートと結婚した。

互いに再婚だった。

アルバートは二十歳の時に、結婚して一年にも満たない妻を流行病で亡くしている。以降、六年間を独り身で過ごしてきた。その間には両親もまた相次いで亡くなって、一人きりの子息であつた彼が爵位を継いでいる。

レベッカといえば、アルバートとの結婚の前月には、前の夫と離縁が決まっていた。

最後に交わつた夜伽から逆算して、幾人もの医師に懐妊していないことを何度も確かめられた。

そうして、子を宿していないことが確かなところで離縁となつたのである。

レベッカの元の夫エドモンドは、この国の王太子だった。

彼との三年に及ぶ結婚で、レベッカが懐妊できなかったことを理由とする離縁だった。

学園を卒業すると同時にエドモンドの妃となつたレベッカは、来月、誕生日を迎えれば二十二歳になる。

二歳年上の夫との関係は、決して悪いものではなかった。

エドモンドは優しい人だった。だからレベッカをほっぽり出すようなことはしなかった。

なにより彼は、レベッカのこれからの人生が安寧であるように、離縁後の暮らしを整えてくれた。エドモンドは、自身が最も信頼する側近に、子を成せない元妃を下賜したのである。

下賜されてしまったのが、二度目の夫となったアルバートだった。

『賢王を愛せ』をモットーとする廷臣、マグダナス伯爵家の若き当主である。

「奥様、お疲れでしょう。さあさあ、お休みなさって。お茶をご用意いたしております」

その言葉に、レベッカはいそいそと刺繍道具を片付ける。

「マルガレーテありがとう。なんだかいい香りがするわ。焼きたてなのかしら」

「はい。先ほど焼き上がったばかりです。フレッシュバターもございます。勿論、苺のジャムも」

早くしないと冷めてしまう。熱々の焼き菓子に冷たいバターが蕩けるところが美味なのだ。

声をかけてきたのは侍女頭のマルガレーテで、レベッカの身の回りの差配は彼女が担っている。

生家の母より少しばかり年嵩としかさと思われる彼女のことを、ここに来てからの短い間で、すでに信頼を寄せている。

「ねえ、マルガレーテ。貴女も一緒に如何かしら。アンネマリーも」

レベッカがそう言えば、マルガレーテは少しばかり逡巡する様子を見せた。それから後ろにいる侍女へと振り向いた。

彼女の背後には、栗毛色の髪をした若い侍女が控えている。

「アンネマリー、貴女もよ」

もう一度誘ったことで、午後の休憩は女主人と使用人たちのお茶会へと場を変えた。

「私、お茶会って久しぶりなの」

令嬢時代には、気の置けない友人たちと度々お茶会を楽しんだ。母と一緒に、婦人がたのサロンに集うこともあった。

それもエドモンドの妃になってからは回数が減っていた。

元より王太子妃は、お茶会すら気楽に開けない。

王太子妃の茶会とは「政治」であり、そこに友人たちを招くことには慎重にならざるを得なかったのである。

焼きたてのスコーンにフレッシュバターを乗せて、欲張りかしらと思いつつ、少し多めに苺のジャムを重ねた。

はしたないかしらと思いつつ、更にクロテッドクリームを添えて、てんこ盛りになったスコーンの欠片を頬張った。

——しあわせ。おいしい。

こんな美味しいお茶とお菓子を楽しめるなんて、私は幸せ者なのね。

レベッカのために心を配る使用人たち。

今日のこと、執事からアルバートに報告されるだろう。夫はレベッカのために、使用人以上に心を配る。

そんな、エドモンドが敷いた幸福な人生を、レベッカは決して無下にはしない。

第二章

エドモンドとの離縁が成立したあと、レベッカが生家へ戻ることはなかった。それは生家が出戻りの娘を拒んだからではなく、アルバートがそのまま屋敷に移ってほしいと望んでいたことだった。

レベッカは、王城から真^ま直^すぐ伯爵邸へと運ばれた。

文字通り、「運ばれた」のだと思う。

馬車の座席の左右は荷が積み重なって、レベッカはその間に挟まるように座っていた。

それらは、エドモンドに興^{こし}入^いれる際に両親が持たせてくれたドレスで、珍しく強情を見せたレベッカが自分で荷造りしたものだ。

座席も足元も荷物に囲まれていたから、レベッカも荷物のように見えただろう。

あの王城で、私もお荷物になっていたのかしら。

ふとそんなことを考えていると、

「レベッカ様」

向かい側に座るアルバートから声をかけられた。

「もう敬称は必要ありませんわ」

そう言つて、レベッカは小首を傾^{かし}げて微笑んだ。

「だって、私は貴方様の妻ですもの」

下賜される際に、離縁の書類と横並びにされた新たな婚姻誓約書にサインをした。

今はもう、戸籍はアルバートの元にある。

「私のことはレベッカとお呼びくださいませ。貴方様のことはなんとお呼びすればよいでしょう。旦那様？ それともアルバート様？」

レベッカはそこで、真向かいに座るアルバートを見ると、そのまま呼びかけの練習を始めた。

「旦那様、アルバート様、アルバート様がよいかしら、やっぱり旦那様？」

旦那様、アルバート様と連呼されて、アルバートは居心地の悪そうな顔をした。

しばらく様子を見ていたが、旦那様、アルバート様の連呼がやみそうにないことで、とうとう彼のほうから言い出した。

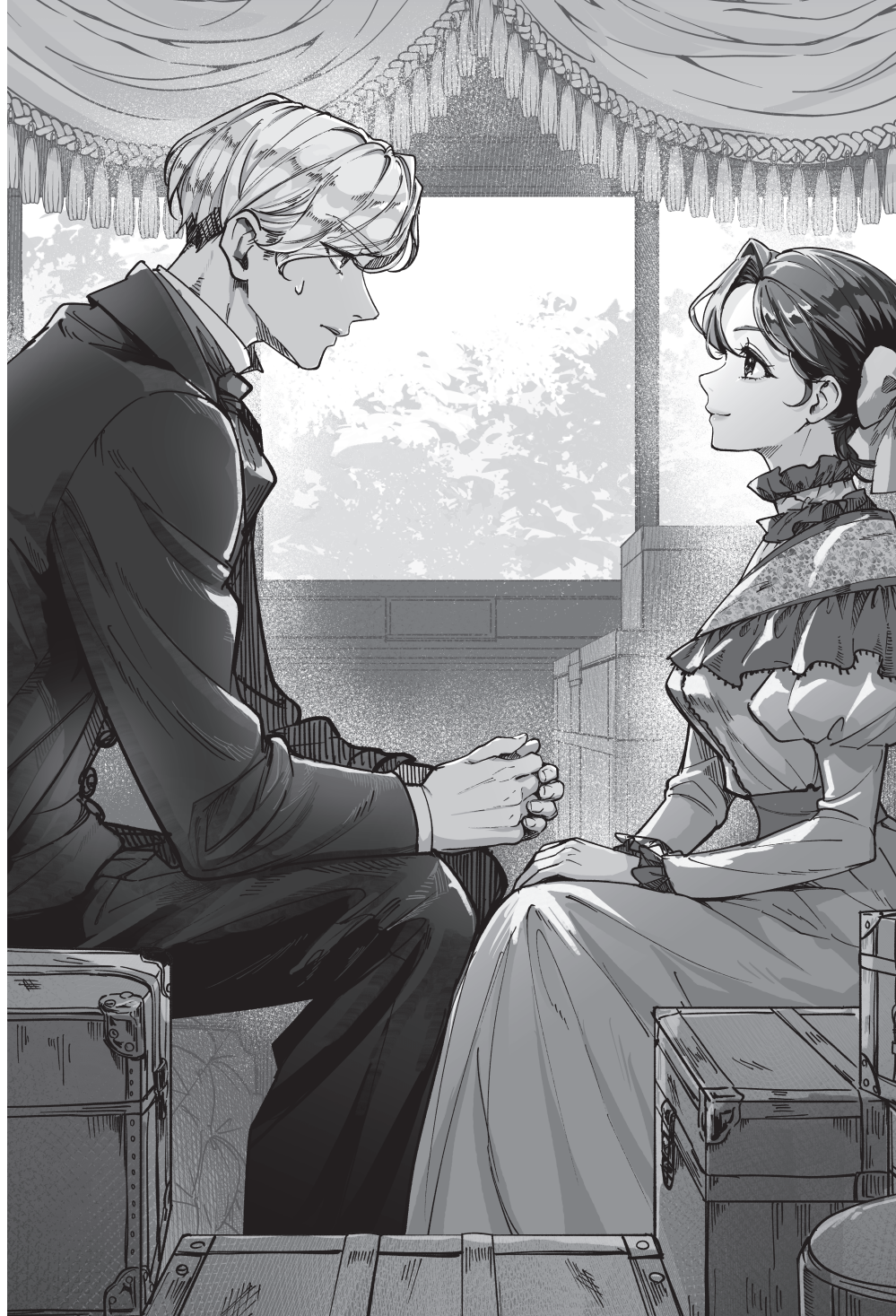
「旦那と呼んでいただくか」

「承知いたしました。それでは、旦那様」

そこでレベッカは、にこりと笑った。その笑みを、アルバートは黙^{もく}したまま見つめていた。

彼の座席の左右にもレベッカの荷が積まれており、微動だにせずこちらを見るアルバートは、精巧^{せいきう}な人形のようにも見えた。

そんな経緯で、慌ただしく女主人となったレベッカだった。



初めて足を踏み入れたマグダナス伯爵邸では、玄関ホールの左右に分かれて深く腰を折る使用人たちに出迎えられた。

王城でも、多くの使用人たちから傳^かしずかれて暮らしてきた。彼らの忠心を疑ったことはなかったが、その本心までは最後までわからなかった。

彼らは結局のところ、エドモンドのために存在しており、エドモンドのためにレベッカに仕えていた。エドモンドのためなら、何も知らぬ顔でレベッカを欺^{あそ}む。

別に、虚言^{きよげん}や偽り^{いつわ}を言われたわけではない。

だが無言もまた時に欺きとなるのだと、王城の暮らして知ったのだった。

彼の腹心の部下であるアルバートも、無言のままレベッカを欺くのだろうか。

だが今はもう、何が真実かそうでないかは、どちらでもよいと思っている。

レベッカはすでに王城を出た。王太子妃の席を降りて、同時に伯爵夫人となった。

前夫と現夫のならした道を、真っ直ぐ歩くことより先に進む道はない。

「初めまして。これからお世話になりますわね。私の名はレベッカ。今日からマグダナス一族の一人となりました」

レベッカの言葉に、使用人たちは再度腰を折って頭^{こゝろ}を垂れた。折角、楽^{やす}にしてと面^{おもて}を上げてもらったのに、これではまた逆戻りである。

そこで紹介されたのが、執事のフ란ツと侍女頭のマルガレーテだった。

二人は夫婦で、長くマグダナス家に仕えているという。

「夫婦揃って王族のような名でお恥ずかしい」とフランツから自己紹介をされた。

レベッカ付きの侍女であり、彼らの娘であるアンネマリーを紹介されたのもこの時で、娘の名前で王族寄りだと思ったことは内緒にしている。

この邸の使用人たちは、揃って年齢が高く見えた。

聞けば、すでに鬼籍^{きせき}に入っている前伯爵夫妻が存命のころから仕えているのだという。

その中でも、新米侍女のアンネマリーは貴族学園を出たばかりの十九歳で、そこですっかり思い出した。

レベッカのわずかな変化には、誰も気づくことはなかっただろう。

十九歳とは、エドモンドが迎える新たな妃と同じ年齢である。

若く健康な身体で、健やかな子を産むだろう次なる妃。それがエドモンドの、二度目の妻となるシンシアだった。

侯爵家の娘であつたレベッカよりも三歳若く、彼女の生家は王国の筆頭公爵家である。

レベッカとの初めの結婚がなかったように、エドモンドの離縁が成立すると、彼女は妃教育を理由に王城に私室を得ている。

どれほど前から準備を重ねていたのか、婚礼衣装はすでに支度が整っていた。

国教会で執り行われる彼らの婚姻式は、レベッカとの離縁から二カ月後と定まっていた。

それはシンシアが望んだことらしく、なんでも「六月の花嫁は幸福」というジンクスへの憧れが

あつたからだという。

「王家って、希望を言ったら叶えてくれるもののね」

なにせそんな発想はなかったし、希望なんて聞かれたこともなかった。

レベッカもまた、生家共々王家に仕える臣下の一人として、王国のためにエドモンドを支えるものだと言ふことはなかったのである。

「まあ、聞かれても思いつかなかったけれど」

声に出してみれば、やりきれない思いも紛れる^{まぎ}ような気がした。

離縁を告げられたあと、一人きりになった王城の自室で、身辺整理をしていたレベッカは、そんな独り言を呟^{つぶや}いたのである。

第三章

「お帰りなさいませ、旦那様」

レベッカは、帰宅した夫のそばに、とととと歩み寄った。

それは生家の母がそうしていたからで、レベッカにとつての夫の迎え方であった。

背の高いアルバートを見上げて微笑めば、夫は腰を屈めて、レベッカの唇にそっと触れるだけのキスをした。

それもまた、生家での外出先から戻る父と同じ姿で、レベッカにとってのお帰りたさいまの日常的な挨拶だった。

だが、彼女は知らない。

それは生家であるエリントン侯爵家の常識で、世の貴族のすべてがそうではない。レベッカの両親は、鴛鴦夫婦で有名なのだ。

現にアルバートも、前の結婚で妻にあんなたさいまのキスをしたのだろうか。

六年も前のことであるから、使用人の中には記憶が朧けな者もいた。

晚餐の席で食後の紅茶が供されると、レベッカは、ちらりとアンネマリーを見た。

わかっております、今ですね！ 彼女はそこで薄翠の瞳をくりりとさせて、承知しましたという顔をした。

逸る気持ちを堪える姿が初々しい。

澄まして歩く様子に危うくツボに入りかけたが、奥歯を噛み締め笑わぬように我慢した。

澄まし顔のアンネマリーが、アルバートに向けて恭しくトレイを差し出した。

トレイには、純白のハンカチが綺麗に畳まれ乗っている。

「ハンカチかな？」

どこからどう見てもハンカチにしか見えないのだが、律儀な彼は、レベッカへ向き直って尋ねた。

「ええ。ハンカチですわ」

答えはハンカチ一択であるから、レベッカもそう答えるしかなかった。

「開いても？」

「勿論ですわ」

昼間に刺繍をしていたのはハンカチだった。

繊細な織りの生地には拘りがある。生家の侯爵家御用達である服飾店から取り寄せた。

マグダナス伯爵家の出入り業者をまだ知らなくて、生家の馴染みに頼んだものだった。

生地は最高級品である。

糸も良ければ織りも光沢があり美しい。万が一、刺繍がダメダメでも、刺繍していない部分を使っただけでよい。

レベッカは、そんな軽い気持ちだった。
あれ？

ハンカチを手にしたアルバートは、じつと刺繍を見つめたまま、石膏でも塗られたように固まっていた。

あれ？ どうしたのかしら。

レベッカは、ハンカチを凝視する夫の背後に立つアンネマリーを見た。
彼女は腹芸が全くできない。

思ったことが表情に直結してまるまる出るから、何を考えているのか超絶わかりやすくて助かる。彼女もまたレベッカの気持ちができるらしく、いつしか二人は心と心で会話ができるようになっていた。

以下、心の声。

《旦那様はどうなさったのかしら》

《わかりかねます。元々、旦那様が何を考えているのかわからないので》

《駄目じゃない》

《以後、頑張ります》

アンネマリーとの埒が明かない心の会話を終えて、視線を夫に戻したレベッカは、正攻法を試みた。

「旦那様、どうなさったの？」

真つ当に尋ねてみた。

「あ、ああ」

驚いたことに、アルバートはそこで大きく息を吐いた。まさか今まで呼吸を止めていたのだらうか。

「あのう、お意匠を省略しちゃってごめんなさい」

「省略？」

「ええ。冠の蓐の葉と真珠を省きました」

「それはどうしてだろうか、聞いても？」

「細かいんですもの」

「……確かに」

貴族家の中でも特別シンプルな意匠を、レベッカは面倒が故に省略した。子供でも描けるほどさっぱりとしている。

「美しいよ」

「え？ どこが？」

自分で刺しておきながら、思わず聞き返した。

そんな美しい出来栄えなんかであつただろうか？

「糸が一本も縫れていない」

それは、刺繍をする前のひと手間があるからだろう。

糸を一本ずつ糸束から引き抜いたら、糸端を揃えて合わせる。それを爪先で軽く扱しらいてから生地
に刺す。

その際に、糸が捻ねれぬよう針の運びを一定にする。

手間とも言えない些細ささいなひと手間が、仕上がりを美しくする。

だがそれだつて、刺繡の基本中の基本であり、貴族令嬢ならみんな知っていることである。

とは言え、アルバートがそんな細かいところに気づいてくれたことは嬉しかった。

息をするのも忘れてまで。

「ええつと、省略は……」

「ああ、別にかまわない。三本の剣は我が家の誇りだ。これほど美しく刺繡されているのだから、
それだけで十分だ」

《やったわ、アンネマリー》

《やりましたね、奥様》

視線を交わしてアンネマリーと心の声で会話をする。

思わず笑みが零こぼれて、テーブル越しに向かい合う夫を見た。

彼は最近、髪を切った。

以前は、背中に届く長い金色の髪をリボンで束ねていた。それもレベッカとの結婚の直前に、手
入れの行き届いた艶髪をばつさり切り落としている。

今は襟足も短くして、少し長めの前髪を左側から流している。

前髪なんぞ流そうが流すまいが、すつきりとした顔立ちであるのに変わりはない。

貴族は元々美しい人が多い。それは男女問わずで、皆、相応に整った顔立ちをしている。

その中でも夫は落ち着きがあり、一重瞼ひとえまぶたも相まって華やかさは幾分欠けるかもしれない。

だがそれも、彼を清廉せいれんな人物に見せていた。

むしろ華やきに欠けるのはレベッカのほうで、ブルネットの髪も榛色の瞳も、落ち着きを通り越
して地味なものだろう。

垂れ気味の瞳を縁取る長い睫毛まつげが、若干の華やかさを醸かもし出しているだろうか。

あの壮厳かつ煌きらびやかな王城で、レベッカは地味組の筆頭だった。筆頭とはいえ、あとに続くメ
ンバーは大体が文官だった。

レベッカを妃に迎えたエドモンドは、そこについてはおくびにも出さずにいてくれた。

第四章

アルバートは、行き場のないレベッカを迎え入れたばかりでなく、本当の妻にしてくれた。

初めての夜に二人きりの寝台で、こちらを気遣いながら、丁寧に一夜を通して愛してくれた。

耳元でレベッカの名を呼ぶアルバートも、それに応えるレベッカも、掠れる声で互いの名前を呼び合った。

どんなに子種を授かつて、レベッカには子が成せない。それは幾人もの医師が確かめたことで、何の原因かもわからなかった。

最終的に、あの「少しお時間を取られてお身体を休ませて……」という医師の言葉となった。

たとえ幾夜、愛してもらっても、夫にも伯爵家にも何も返すことができない。

彼はじきに、親族の中から後継に見合う養子を得ねばならないだろう。もしかしたら、もう探しているのかもしれない。

今夜もアルバートは、レベッカを甘く、時折彼らしくない性急さで蕩かした。

長く執拗な口づけに息も絶えだえになって、思わずその背中をタップすると慌てて唇を離してくれた。

はふう、と息を整えてアルバートを見上げると、彼もまたレベッカを見つめていた。

灯りを小さく絞った寝台で、柔らかな素肌を重ねて見つめ合う。

「すまない」

「なぜ謝るの？」

「……節操がなかった」

「ふふ、貴方は私の旦那様よ」

そう言えば、アルバートはレベッカの柔らかな乳房に顔を埋めた。それから再び、今度はことさらに優しく愛してくれた。

愛を交わしたあとの会話を、アルバートは欠かさない。

その前に、彼はいつも、乱れてしまったレベッカの汗を拭いて身を清めてくれる。

今夜も、汗ばむレベッカをいたわるように、彼の手は優しくあった。

アルバートは水差しからグラスに水を注ぐと、レベッカの口元にあてがった。

こくこくと水を飲んで喉を潤したのを確かめると、そのまま同じグラスを呷って残った水を飲み干した。

そんなところはとても男性的に見えて、すでに幾度も肌を重ねているのに、見上げる夫の喉仏にそこはかとなしい色香を感じてしまう。

「業者を、君の生家の出入りに頼んだのだとか？」

それは、あのハンカチを頼んだ服飾店のことだろう。

「ごめんなさい。貴方のご鬘^{ひいき}肩^{かた}がどこなのか確かめずに。勝手にしてしまったかしら」

「いや、そんなことはないんだ」

「いつもどこを使^{つか}つていらつしやるの？」

アルバートから聞いた商会の名は、よく知るものだった。

あそこは王室御用達である。王太子妃時代のレベッカも世話になっていた。

だが、あの商会は兎^とに角^{かど}、値が高い。そしてどこよりも切り替えが早かった。

出入りの外商が手を揉^もむように親切丁寧に接していたのは、離縁が決まるまでだった。

どうやら離縁が公表される前に、次の妃がシンシアであると、どこかで聞きつけたらしい。

外商は、たまたま回廊でばったり会ったレベッカにしどろもどろになって、挨拶を終えたと逃げように去っていった。

あとから知ったことだが、彼はシンシアのドレスを誂^{あつら}えるために、度々、王城を訪れていたらしい。

あの頃から、王家はすでにシンシアを迎え入れる準備を始めていたのだろう。

エドモンドがそれを見^み知らずにいた筈^{はず}はない。もしかしたら、彼がそう整えたのかもしれない。

そしてアルバートも、きっとそのことを知っていただろう。

「気に入らないのか？」

灯りの乏しい寝台の中で、アルバートはレベッカの表情をどう思ったのか、そう尋ねてきた。

「旦那様は、あの商会とはお付き合いが長いの？」

「側近になってからかな」

アルバートは、エドモンドの、とは言わなかった。

彼はこういう些細な場面で気遣いをする。

「嫌なら変えてかまわない」

「よろしいの？」

意外なことに、アルバートは王室御用達の商会を変えてよいと言った。

「ああ。ここは君の家だ。君の好きにするといい」

「それはドレスも？」

「勿論。君の好きな店に頼むといい。私の衣装も同じ店に変えようか」

だがそうなれば、アルバートに面倒をかけてしまう。

「貴方の採寸をし直さなければならぬわ。ご面倒ではなくて？」

「大丈夫だ。君と揃いの衣装も必要だし」

揃いの衣装と言われたところで、レベッカはふと気が重くなった。それは二人が、これから夜会や舞踏会といった社交場に参加するためのものである。

レベッカは、いつまでも邸に籠^{こも}りきりというわけにはいかない。

伯爵夫人として、アルバートの妻として、社交界に出ていかなければならない。

レベッカはそこで思い直した。

そんなことは、初めからわかっていたことだ。大丈夫。アルバートと一緒にいてくれる。

彼は、ここをレベッカの家だと言った。好きにしていようと云ってくれた。

それがたとえ下賜された妻への氣遣いだったとしても、レベッカは嬉しかった。

王城にいた頃は、業者を選ぶなんて自由はなかった。

王族が身に着けるものはすべて、厳しい審査を経てゐる。

たとえ業者がどこであれ、最高品質のものが納められることに間違いはない。

だから、こちらから多少の選択はできたとしても、王太子妃の勝手や我儘が通るわけではなかった。

王城とは煌びやかに見えて、案外、世知辛い世界なのだ。

「あそこは高ければそれで最高級とでも言いたいのかしらね」と、いつだか王妃がこぼしていた。

王妃でさえ、氣に入らない商会のことを大っぴらには言えなかった。

レベッカは、二人だけのお茶会の席で彼女の小さな愚痴を聞いていたのである。

王妃様。

つい先ごろまで義母だった女性を思い出した。途端に切ない気持ちが入み上げて、すぐに思考を切り替えた。

ええっと、なんのお話だったかしら。そうそう、出入り業者のことだったわ。

「旦那様がお許しくださるなら、これからは馴染みのある商會に頼みたいと思って」

「それでいいよ。採寸する時は教えてくれ。君の予定に合わせる」

「よろしいの？ 嬉しいわ。ありがとうございます」

アルバートの言葉が嬉しくて、つい、はしゃいでしまった。

薄暗がりの中、彼の毗がほんのり紅く見えたのは氣の所為だろう。

《やったわ、アンネマリー！ 旦那様のお許しをいただいたわ！》

レベッカは、ここにはいない以心伝心ができる侍女に、喜びの想念を送ってみた。

「ああ、それと」

「なあに？ 旦那様」

二人とも素肌のまま、寝台で横寝になって向き合っていた。

レベッカの露わになった肩に、アルバートは「冷える」と言って掛け布を引き上げた。

「マルガレーテたちとお茶会をしたのだから？」

大きな手でレベッカの肩を撫でながら尋ねる。

彼が不在の間の出来事は、執事のフランクが報告をしている。昼間のことも、彼から聞いたのだろう。

「お茶会なら君の好きにするといい。招待状も来ているんだろう？ 会いたい友人がいるなら、こ

こへ招くといい」

「まあ、本当に？」

「私は社交下手だから、君に頼めるならありがたい。それに君は、そういうのが上手だろう」

アルバートとはエドモンドと婚約していた頃からの付き合いである。

彼は主君の妃を、どんな人物だと見ていたのだろう。

「上手いかどうかは……。そうだわ、お茶会の前に、一度実家に戻ってよいかしら」
アルバートはそこで、「戻る……」と呟いた。

「やあね、旦那様。ただのお里帰りよ。母に元気でいると伝えたいの。父も気にかけているでしょうから」

「あ、ああ、そうか。勿論だ、自由に行き来してくれ」

王太子妃であった頃は、レベッカにそんな自由はなかった。アルバートもそれは知っているだろう。

「嬉しいわ。早速、母に文を出します」

「ああ」

短く答えたアルバートは、それから「お休み」と言つて、唇に触れるだけのキスをした。

第五章

「よろしゅうございましたね、奥様」

翌朝、レベッカの髪を梳かしながら、マルガレーテが言った。

昨夜、アルバートに許された商會の変更は、朝にはフランツにも伝えられていたらしい。

「あそこはお値段とプライドと鼻ばかりが高くて、顧客をどこか低く見るきらひがありますから。確かに扱うお品は最高級なものですけれど、あのお値段なら当然です。そうでなければ、ぼったくりですわ」

ぼったくり。

レベッカはマルガレーテの言葉に、いつもペコペコしながら手を揉む外商の顔を思い浮かべた。

彼は今頃、シンシアにペコペコしているのだろう。

「旦那様のお衣装も、お店を変えることになったの」

「どちらかに当てがごさいますので？」

「ええ。生家が鼻屑にしているところをと思つて」

レベッカがそう答えると、鏡の中でマルガレーテが目を細めた。

「それはようございました。これでやっと旦那様のお衣装にヤキモキすることがなくなります」

「まあ、ヤキモキ？」

「ええ」

マルガレーテが言うには、あのペコペコ外商の商会が納める品は、確かに一流品ではあるそうだが、どこか鼻につく下品ないやらしさがあるのだという。

レベッカは、思わず鼻をスンスンと鳴らしてしまった。

下品ないやらしさって何かしら。それってどんな匂いなの？

今までアルバートの装いに、鼻につくいやらしい匂いなんて感じたことはなかった。

レベッカにしても、王太子妃時代にはあの商会が納めるドレスを着ていた。元よりシンプルなデザインが多かったからか、下品ないやらしい風ドレスに当たった記憶はない。

もしかして、手抜きをされていたのかしら。

じゃあ、エドモンドは？ と前夫の衣装を思い浮かべた。

いやいや、あの方はご自分が燦々^{さんさん}と輝いていらつしやるのですもの、衣装なんて関係ないわ。

彼は論外、と切り捨てた。

「旦那様も奥様のお見立てでようやく垢抜けることでしょう。あの似合わない可怪^{おか}しな消炭色^{けしすみ}の服とか」

「消炭色？」

ええ、と頷^{うなず}きながら、マルガレーテは続けた。

「色はよいのです。暗色が旦那様に大変マッチしておりますわ。どこが可怪^{おか}しいのかよくよく眺^{なが}め

てみましたら、ボタンの金色がいやらしい色をしておりました」

「ええ？ 金色がいやらしい？」

「ええ、ええ、それはもう。我は身分高き貴族だぞ、よく見るがいい、と声高^{こゑたか}に言いながら歩いているような金ピカ具合でございました。それでわたくし」

そこでマルガレーテは口を噤^ぐんだ。

え？ 気になる。続きは？

レベッカは、言いかけたその先が気になって、鏡に映るマルガレーテを見た。

たつぷり間合いを取ってから、マルガレーテはようやく話しました。

「わたくし、街に出まして金ボタンを買って参りました。老舗^{しんせ}のテーラー、アンダーソン＆レーベンのものでございます。勿論、経費で落としておりますのでご心配には及びません」

マルガレーテは私費^{みせ}で賄^{まかな}ったのではないと説明したが、レベッカはそこまで思いついてはいなかった。

「流石^{さすが}としか申しようがありませんでした」

そこでマルガレーテは、目を閉じて感じ入るような表情となった。だがその手は、些^{いささ}かも疎^{おろそ}かになることなく、レベッカの髪を梳かしている。

「なに？ 何がそれほど貴女を感動させているの？」

気になって仕方がない。流石^{さすが}って何？

「洗練^{さび}された爽やかな風を感じさせながら、格調高く、正統かつ伝統的。これぞ旦那様というボタ

ンを見つけました」

「洗練された、爽やかな風……」

レベッカは、それは一体、どんな風なのだろうと考えた。

これぞ旦那様って、どんな旦那様？

考え込むレベッカを置いてけぼりにして、マルガレーテの話は続く。

「サイズも測っておりましたから、ボタンホールに合わせて大小取り混ぜて買い求めました」

「まあ！ ボタンを大小取り混ぜて？」

それほど驚くことでもないのだが、レベッカはマルガレーテの話術にすっかり引き込まれて、うっかり驚いてしまった。

するとマルガレーテも乗ってきたのか、心なし得意気な顔となった。

「ええ。それを針子に頼んで、旦那様のお衣装のボタンと付け替えさせたのです」

「まあ……マルガレーテ。思い切ったわね」

「はい。わたくし、少なくとも旦那様より審美眼しんびがんは優れていると自負しております」

マルガレーテは何気に自慢したが、それは間違いないことだとレベッカも思った。

「それで、結果はどうだったの？」

「丁度今頃、お召しになられていらつしやるかと」

「今日はそのお衣装でお勤めに行かれるのね？」

「左様でございます」

レベッカが声を潜めて言うと、マルガレーテもまた声を潜めて答えた。

二人はまるで悪だくみをするように、鏡の中で視線を交わした。

そこでマルガレーテに尋ねてみた。

「もしかして、今までのお衣装も貴女が手直しをさせていたの？」

レベッカはこれまでも、アルバートの装いを「下品でいやらしい」とか「成金なりきん」だと思ったことはなかった。

ちなみにマルガレーテは「成金」とまでは言っていない。

「勿論でございます。そのために特別な会計の勘定がございますから」

彼女は先ほども「経費で落としている」と言っていた。

「ええと、差し支えがなければ聞いてもよいかしら。その勘定とは何なの？」

「『旦那様被服改善費』です」

「ええ!？」

そんな勘定科目なんて初めて聞いた。あとでフランツに頼んで帳簿を見せてもらおう。吹き出してしまふかもしれないけれど。

マルガレーテは会話しながらも、レベッカの緩やかな巻き髪を丁寧に梳かした。

香油を塗ったブルネットの髪が艶を増していく。

「お美しいですわ、奥様」

「ふふ、ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

鏡の中のマルガレーテに微笑めば、彼女もまた目を細めて笑みを返した。目尻の皺に年相応の品が見えて、こんなふうに年齢を重ねたいものだと、そんなことを思った。

ゆったりと結い上げた髪のおくれ毛を確かめて、レベッカは食堂室へ向かった。アルバートの衣装が気になって仕方がない。

心なし早歩きになったところで、廊下の先に見慣れた背中を見つけた。マルガレーテの言ったとおり、今日の装いは消炭色のジャケットだった。

だが後ろ姿だけでは、成金の匂いは感じられない。

前から見てみたい。どんなお衣装？ ボタンだけ直してなんとかなるもの？ わくわくなのかドキドキなのか、よくわからない期待が湧いてくる。

レベッカは待ち切れずに、思わずその背中に呼びかけた。

「旦那様」

呼ばれてアルバートが立ち止まった。次の瞬間にはブンつと風を切るようにこちらへ振り返った。期待を込めて見つめたためか、活動写真がひとコマひとコマ変わるように、アルバートもひとコマひとコマ動いて見えた。

「あれ？」

てつきり、下品で成金でいやらしい匂いをぶんぶんさせていると思った夫は、超絶格好よく見えていた。

第六章

「どうしたんだ？」

レベッカに呼び止められて、何事か起こったのかと思っただけ。アルバートは、すたすたと足早になって、あつという間にこちらへ歩み寄ってきた。

「おはようございます」

つい一刻ほど前に、寝台の中で目覚めのおはようを言ったのだが、ここは儀礼的に二度目のおはようを言ってみた。

「ああ、おはよう。ん？ 元気がないな。あ、ああ、昨夜は無理をさせてしまったか」

こんな朝っぱらから廊下のだ真ん中で、この夫、なんてことを言うんだ。

目が覚めるような夫の破廉恥^{はれんち}発言に、足を踏んでやろうかと思ったが、羞恥心^{しゆうちしん}をどうにか収めてアルバートを見上げた。

マルガレーテは随分と、彼の装いについて情けないと言っていた。だが目の前の夫は、髪も肌も艶々で、なんなら昨夜よりも元氣に見える。

それに、例の消炭色のジャケット姿は、どこもいやらしくなんてない。

成金の風はどこへ行ったの？ ふんふん漂ういやらしさは？

レベッカはアルバートを見上げたまま、スンスンと鼻を鳴らした。
「ん？ どうしたんだ？」

廊下で突っ立ったまま、二人が互いに見つめ合う。
使用人たちは、目のやり場に困ってしまった。

王城生活で人目に晒されることに慣れているレベッカは、周囲の視線を気にすることはなかった。
まじまじと、夫の頭から足先までを舐めるように眺めた。

「素敵」

「あ、ああ……」

旦那様、とっても格好いい。

でもなんだろう。このほんのり残念な気持ち。

折角、素敵な姿を見たのに、レベッカはどこかで「成金ダサダサ」な夫を期待していた。

ちなみにマルガレーテは、成金ともダサダサとも一言も言っていない。

「ねえ、旦那様。ちよつとそちらに寄ってもよろしい？」

返事を聞く前に、レベッカはアルバートへと歩み寄った。もう十分接近していたから、歩み寄ったことで密着に近くなった。

数時間前には素肌で抱き締め合っていたのに、至近距離での接近が少々気恥ずかしい。

夫の胸元まで近寄れば、なるほど、件のボタンが目に入った。

「確かに」

「え？ 何が？」

「マルガレーテの言ったとおりだわ。『洗練された爽やかな風を感じさせながら、格調高く、正統かつ伝統的。これぞ旦那様という金のボタン』。正しくそうだわ」

「……いや、よくわからないがありがとう」

意味がわからぬまま、どうやら褒められたらしいと察したアルバートは、素直に礼を言った。

レベッカはそこで、後ろに控えるフランクを見た。

《妻の審美眼をお褒めいただき恐縮です》

彼にはちゃんと通じており、心の声が届いた。どうやらアンネマリーの以心伝術は、この父親からの遺伝らしい。

ボタンを替えただけなのに、こんなに素敵になるものなのね。

それはボタンの実力か、アルバート本人の魅力ゆえか。

流石に王室御用達だけあって、生地は上質なものであった。

濃い消炭色も、落ち着きのある夫に更なる落ち着きを加味して、とっても落ち着き払っている。

マルガレーテの目利きによって補正されたジャケットは、アルバートによく似合っていた。

元の衣装を見ていないのだが、ボタンを替えただけで確かに格調高く感じられる。

揃いで衣装を作る時には、彼に似合う洗練されたものにしよう。

なんだったかしら、風、えーと、洗練された爽やかな風が感じられるお衣装を、とレベッカは思うのだった。

どことなくご機嫌なアルバートが、出かける際に、見送りをするレベッカに行つて参りますのキスをする。

だがそれが、いつもより濃密な上に長かった。アンネマリーの《きやー》という心の声は、聞こえなかったことにした。

朝から甘い空気が飛び交つた邸内であつたが、アルバートがいなくなると、すぐに落ち着きを取り戻した。

昨夜のピロートークでお許しが出たことで、早速、生家に宛てて文を書く。両親はきつと心配していることだろう。

夫は王太子の側近で、レベッカは、ほんのちよつと前まで王太子妃だつた。

エドモンドの妃でいた頃は、両親とは公式の行事や社交場で顔を合わせるだけで、二人も権力構図への影響に留意して、安易にレベッカと接触することを控えていた。

勿論、母とは定期的に文を交わしていたが、それも離縁が決まったことを知らせるものが最後となっていた。

再婚してから、まだ一度も生家に帰省していない。

アルバートに禁じられていたわけではなく、レベッカ自身も身辺が落ち着いてからと考えていたのである。

アルバートは、再婚の際にレベッカを生家に戻すことをしなかった。

だからと言って、生家との交流を嫌がる様子はない。

なぜ彼があの日、レベッカを真つ直ぐ伯爵邸に連れ帰つたのかは、今も聞かず終いのままだつた。そうこうするうち、あつという間にひと月が経っていたのである。

王城では次の妃となるシンシアが、すでに部屋を与えられている。

来月の婚礼の儀、エドモンドにとつて二度目の婚姻式には、両親も参列する。

娘のあまりに変わってしまった身の上に、きつと母は夜も眠れずにいるだろう。

ゆつくり会いたいと思つていたから、先にアルバートのほうから許しをくれて嬉しかった。

レベッカは、久しぶりに便箋を取り出した。

春の盛りだから、インクは紺碧色にしよう。

このインクは特注品で、書いたばかりのうちは青味が強い。だが時間が経つと変色して緑色を増す。

母に届くころには、芽吹く山野の若葉のような春の風を届けてくれるだろう。

今日のレベッカのテーマは「風」だつた。

「爽やかな風」を纏まとつて王城へ向かう夫の背中を思い出したところで、ふふつと笑みが零れた。王城でレベッカが使うインクと言えば黒だつた。

ブルーブラックも多かった。たまに青も使うが頻度は低い。

そういえば、このインクはだいぶ古いものである。エドモンドに嫁ぐ少し前に買ったものだ。三年経つても大して量は減っていない。それほど使つていなかったということだろう。

紺碧色は、二度目の夫、アルバートの瞳の色である。最初の夫のエドモンドは、澄んだ青い瞳だった。

第七章

「レベッカ！」

「お母様！」

互いに、ぱたぱたと小走りで駆け寄ってからの、ひしつ、ガシツ、と音がしそうな固い抱擁。
大袈裟なボディランゲージは、エリントン侯爵家の特徴の一つである。

侯爵邸で両親はあちこちで抱擁を交わし、屋敷の中でも父は母をエスコートする。そんな両親の姿を見てレベッカは育った。

「ようやく貴女に会えたわ。すっかり痩せてしまつて……いないわね」

母は、レベッカの頬から下腹部までを眺めて言った。

「ええ、お母様。むしろ太ったくらいよ」

「お食事を、きちんと食べられているのね？」

「ええ。おやつもしっかり。焼きたてスコーンにフレッシュバターが堪らないの」

クロテッドクリームも好きではあるが、マグダナス伯爵家のフレッシュバターは塩の加減もよく絶品なのである。

ティールラウンジに向かう廊下で、すでにおしゃべりが始まる。

邸内は、母の好みで季節の花がふんだんに生けられて、そんな生家がレベッカは好きだった。
「やっと貴女を返してもらえると思っていたのに、あの若造、よりによって自分の部下に下賜するなんて」

「お母様。若造ってまさか殿下のことかしら」

「ええ、そうよ。私にしたら、あんなのは尻の青い小童よ。陛下はそうねえ、爺にはちよつとお若いかしら」

離縁の末に下賜を選んだ王家に、母の言葉は辛辣だった。

ここにはいない王太子と国王を、若造、爺ときき下ろした。勿論、レベッカはエドモンドのお尻が青くないことは知っていたが、ここでは黙っていた。

「駄目よ、お母様。そんなことをよそのお茶会で言ったりしては。それに陛下はお母様とさほどお歳は違わないでしょう」

「ええ。業腹なことですけれど、一応、我慢はしているわ」

業腹と言いつつ、母もレベッカの離縁が止むに止まれぬことであつたと理解している。

ただ娘の心を暗くさせないように、質の悪い冗談にして気軽を装っているのだつた。

柔らかな笑みを浮かべる母は、年齢よりも若々しくあるが、三年前より歳を取って見えた。

そんな母が内々のお茶会で、若造、爺と連呼していることをレベッカは知らない。

不敬を問われぬように念のため、「ワクワゾー」「ジジー」と人名に寄せて呼んでいることも知らずにいた。

「貴女が再婚してから、文を頂戴したのよ」

「それは、どなたから？」

社交界で顔の広い母には、日々多くの文が届けられる。

「マリアンネ様よ」

「まあ……」

「まるで詫び状のようだったわ。読んでいるこちらの胸が痛むほど」

「……そう」

マリアンネとは王妃の名である。母と王妃は、二人が令嬢の頃から親しく交流する間柄だった。

王妃はレベッカが王城を出る最後の日まで、暗く表情を曇らせていた。

その姿が、今にも涙を零しそうに見えた。だからレベッカは、大丈夫だと伝えたくて、背筋を伸ばして俯くことはしなかったのである。

ちなみに、アンネマリーの名を王族寄りと思つたのも、王妃の名がマリアンネであるからで、十中八九寄せているので間違いないだろう。

「貴女の幸せを願っているそうよ」

「私はもう、ちゃんと幸せよ」

レベッカが微笑むと、母は眉を下げた。

なんだかしみりしてしまった。そこで場の空気を変えるように、母が話題を移した。

「それで、二人で揃いの衣装をこれから作るというのね」

「ええ、出入り業者を変えることを旦那様がお許しくださって。こちらと同じところを使おうと思うの」

「そう……旦那様とお呼びしているの」

母はきつと、アルバートとレベッカがどんな暮らしをしているのか、心配していたのだろう。

「旦那様」と呼んだことを尋ねてきた。

「そうなの。お名前とどちらがよいか試してみたのだけれど、旦那様をご自分でこちらがよいと仰おこしやって」

おしゃべりは止まない。話題は尽つきまない。お茶はすでに三杯目となっていた。

こんなに楽しいお茶会なんて、久しぶりのことだった。

そこで、ふと気がついた。

今だって、伯爵邸でお茶会を楽しんでいる。

マグダナス伯爵夫人となつてからも、使用人たちと一緒に楽しんでいる。

「幸せになれそうなのね？」

「幸せよ。幸せにしていたいたの、お母様」

レベッカは変わらぬ返答をした。

エドモンドとアルバート。前夫と現夫が用意したレベッカの幸福。

レベッカは、二人の夫がならした道を歩いて「幸福な人生」を生きていく。

「早速、そちらに外商を向かわせるわ。大急ぎで仕立てなければ間に合わないでしょう。貴女だけ

ではなくて、旦那様とやらの分も揃えるのでしょうか？」

「旦那様とやら、ではなくて立派な旦那様よ」

レベッカの抗議を聞き流し、母は続けた。

「そうそう、サロンへのお誘いをいただいているの。勿論、マグダナス伯爵夫人、貴女へよ」

レベッカが伯爵邸に引き籠もつて、刺繍をしたりアンナマリーたちとお茶会を楽しんでいる間に、母はレベッカの社交界での居場所を整えていた。

友人たちからも文が届いていた。彼女たちもきつと、令嬢時代のように変わらずレベッカを受け入れてくれるだろう。

レベッカの人生。

滑車に乗って坂道を滑走するような、登ったり下ったり忙せわしない人生だ。

令嬢時代はほんの三年前のことなのに、レベッカはもう二度目の夫と暮らしている。

「人生って、旅ね」

まるでトロツコで走り抜ける旅のようだ。

「何を年寄りじみたことを言っているの」

母がレベッカを見つめる。

「旅なら楽しみなさいな。一人旅が淋しいなら道連れになつてあげてもよくてよ？ 長生きして貴女の道中にお付き合ひするわ」

そう言つて、ふわりと笑つた。春の盛りにびつたりな、そんな笑みだった。

「随分と手際がいいな」

アルバートは帰宅すると同時に、待ち構えていたレベッカに腕を取られて、そのまま応接室へ連れていかれた。

急かされて歩きながら、ただいまのキスを忘れないところが律儀である。

応接室には、母が手配した商会の外商がメジャー片手に控えていた。

帰宅早々、あちこち測られ、アルバートは成すがままにされている。

「超高速で仕立ててくれるそうよ。ね？」

ね？ とレベッカは外商へと振り向いた。

「お任せくださいませ。ご要望にお応えできますよう励ませていただきます」

外商はそう言つて腰を折つた。だが彼は、件の外商のようにペコペコもしなければ、手をモミモミもしなかった。礼儀に適つた姿勢である。

やつぱり、あのペコペコさんが可怪しかったのね。

レベッカは、かの外商をそう断定した。

「それで、どんな注文をしたんだ？」

「ええ。『旦那様に、洗練された爽やかな風が感じられるお衣装を』とお願ひしましたの」

「は？」

レベッカのマイブーム「風」は、今現在も継続中であつた。

第八章

エドモンドとシンシアの婚礼は、六月の最初の週に執り行われる。

間近となつた婚儀の準備もあつて、アルバートは多忙らしく帰りが遅い。この頃は、王城に泊まり込むこともある。

そんな時に、レベッカは悩んでしまう。

「ねえ、アンネマリー。行つたほうがよいと思う？」

「行かなくてもよろしいと思います」

「はつきり言うのね」

「奥様は、もやあ、とぼかされるより、はつきりわかりやすいほうが好みだと思ひまして」

アンネマリーは腹芸ができない。

彼女の持ち味は、豊かな表情と、はきはきとした物言いである。

「貴女の言うとおりだわ。私、あのもやあつとした言い方は、とても迷うの。いいの？ 悪いの？ どっち？ つて。それで貴女は反対派なのね」

レベッカがアンネマリー相手に相談していたのは、アルバートへの届け物だった。

今夜は王城に泊まると知らせが来たのは、つい先ほどのことだった。

そこで、お着替えと一緒に何かお夜食的なものを差し入れたほうがよいかしら、という話になった。

「差し入れることはいいの。むしろ、そうして差し上げたいわ。でもねえ、お城に行くのはねえ。ちよつとあそこは今、アウエイなのよね」

「当然です。あんなところ」

アンネマリーのはきはきとした口調は、さっぱりとして小気味よい。だが今日は、少々はきはきしすぎではなからうか。

彼女は憤っている。

レベッカの身に起きたことに、レベッカの代わりに怒っているのだ。

その気持ちが嬉しかった。隠し事が全くできない正直者の侍女を大切にしようと思う。

「アンネマリー。言葉が過ぎますよ」

そこでアンネマリーを窘めたのは、マルガレーテだった。

「奥様、ご無理なさることはございません。今回も私が参りましょう。ですが、もしも旦那様のお身体がご心配なようでしたら、私の後ろからそつと着いていらしては如何でしょう」

確かにそのとおりだった。

レベッカは、アルバートに自分で差し入れをしたいと思いますと思っている。けれど場所が場所なだけに躊躇っているのだ。

「あそこは王族の執務室に近いから、一般人の立ち入りはできないわ。それで待合室があるの。泊

まりの時には家族が面会できるように。そこに旦那様をお呼びすればお会いできるわ」

心配顔のアンネマリーに、そう説明した。

「奥様の心の声はなんと仰っておられるのですか？」

マルガレーテに尋ねられて、レベッカは正直な気持ちを打ち明けた。

「旦那様に会いたいわ」

「では参りましょう。私がお供いたします」

マルガレーテはそこで、アンネマリーを見て言った。

「アンネマリー、お前も一緒にいらっしゃい。私が前方を、お前は後方から奥様をお護りするのです」

どこの戦地に向かうのか。三人は顔を寄せ合うと、その場で作戦会議となった。

とうとう、アルバートに下賜されたあの日以来、初めて王城に足を踏み入れることとなった。

アルバートは、レベッカが無理することを望んではないだろう。

だが、レベッカは彼の妻になった。王城に生きる男の妻となった。

どのみち、祝賀の夜会には出なければならぬ。

エドモンドとシンシアの婚礼を祝う夜会に、レベッカは臣下として出席する。

「いつかは行かなければならないのですもの。それがちよつと早くなるだけだわ」

独り言のように呟いたレベッカを、マルガレーテもアンネマリーも何も言わずに見守っていた。

「えーと、お着替えはこれでよいわね。お煙草も入れたし、寝酒は必要かしら」
「寝酒を飲んでしまつては、お仕事の最中に寝てしまいます」

「……そうよね。じゃあ、おやつは？ 旦那様って、甘いものが好きだし」

アンネマリーと差し入れの中身を確認しながら、緊張と冒険心が交互に湧いてくる。
これから王城へと出向く。

王城の使用人たちには秒で面が割れるだろう。顔見知りの貴族に会うかもしれない。
離縁してからひと月以上が経っていた。

今更、気にしてもしょうがない。執務室にさえ近づかなければ大丈夫だろう。

あとは前進あるのみだ。

レベッカは、心を決めて登城した。

王城に着くと、直ぐ様、マルガレーテが前衛となり、後方をアンネマリーが護る。
左と右は、伯爵家の護衛騎士が各二名ずつ付いて脇を固めた。

計六名がレベッカを取り囲んだ。すべては王城に一拍するだけの夫へ差し入れをするために。

当然ながら、フォーメーションを組む見慣れない小編隊は目を引いた。

瞬^{また}く間に、元王太子妃が騎士たちを引き連れ乗り込んできた、と誤報が流れてしまったのは仕方ないことだろう。

レベッカ隊は、完全護送のまま無事に待合室へ到着した。

最初のミッションはクリアである。

レベッカはそこで使いを出して、アルバートを待った。だがすぐに騒々しい物音が聞こえてきた。
常に人の出入りがある王城は、それなりに騒がしい場所である。

けれどこんなドタドタした音なんて、何か異変があつて近衛騎士が駆ける時しか聞いたことがない。

え？ 近衛騎士？ 一体なにが起こつたのかしら。事件？ 事故？

不安にバクバクと鼓動が胸を打つ。ドタドタという音が耳に響く。

騒々しい足音がどんどん近づいて、待合室に緊張が走った。

護衛騎士の一人が剣の柄に手を掛けたその時。

「レベッカ！」

「旦那様！」

バターン！ と音を立てて扉を開き、転がる勢いで駆け込んできたのはアルバートだった。

名前を呼ばれて、レベッカも反射的に呼び返してしまった。

「どうした！ なぜ君が城にいる！ 何があつたんだ！ 誰が君を呼びつけた！」

矢継ぎ^{やつ}早に質問攻めにされて、何から答えるべきか一瞬迷った。

「誰に呼ばれたんだ、レベッカ」

アルバートはレベッカの両肩を掴み、声を潜めて問うた。

どれほど急いで駆けてきたのか、額に大粒の汗が^じ滲んでいる。